

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 次田 瞬

次田瞬氏の論文「自然主義的意味論の研究」は、心的状態の一つであり、人間の行動を引き起こすとされる、信念や欲求を、自然科学的な方法によって解明する道筋を付ける、という、いわゆる自然主義的理論の構築を目論むものである。一般に、信念や欲求という心的状態は、命題を内容とする命題的態度と呼ばれる働きをなし、何かに向かう、何かについて、という志向性を持つとされ、そうしたあり方は客観世界との対応による因果性とは異なっていると捉えられる。本論文は、こうした、自然科学的に扱いにくそうな信念・欲求に関して、現代英米哲学の知見を批判的に検討して、自然主義的に理解する可能性を描出しようとする野心的な試みである。

本論文は二部構成をなす。第一部(1-3章)では、心的現象の自然主義的理論として有力だと思われる機能主義を検討する。第二部(4-8章)では、第一部を踏まえて、信念・欲求の志向性を論じる。第1章では、機能主義と行動主義とを比較し、心身因果を許容しうる点などで機能主義の方が優れていると論じる。第2章では、行動主義よりも有望な考え方として心脳同一説を取り上げ、それと機能主義とを比較検討した。そして、同一説を擁護する諸々の議論を批判しつつ、同一説と両立しない因果役割機能主義を擁護する。第3章では、以上のように輪郭づけられた機能主義にも、信念・欲求の命題的態度を処理する理論が不足していると、つまり信念・欲求の内実を過小決定ししないと指摘して、その点を補うには機能主義とは別立ての理論が必要だとして、機能主義さえ越えていく必然性が示される。次に第二部に入り、第4章では、クワインによって展開された、命題的態度に対する消去主義が検討され、彼の行動主義的な前提と指示の不確定性の結びつきを析出した。第5章では、デイヴィッド・ルイスの解釈理論を取り上げ、その前提をなす合理性帰属の問題点を指摘し、動物にも帰属可能な志向性の扱いについての不備を指摘した。第6章では、信念ベースで欲求を説明するドレッキの議論を取り上げ、そこに進化理論と親和する目的意味論を見いだすが、話者の興味や関心を取り入れる点などで自然主義的意味論として不適切であると論じる。第7章では、欲求ベースで信念を説明するミリカンの議論を俎上に上げ、動物のコミュニケーション行動を包括する目的意味論、すなわち表象についてその消費者の行動機能によって規定するという考え方、を取り出し、一定の見込みを確認する。そして最後の第8章では、オペラント条件付けの概念を介したホワイトの「基本的欲求」に関する提案を取り上げ、それに沿って信念・欲求を構成する物理的事実を解明する見通しを確認した。

自然主義的に位置づけられる信念・欲求が基本的なものに限定されているという弱みがないわけではないが、基本的なものをまず処理することが自然主義的意味論の橋頭堡になるとする評価も十分ありえる。心の哲学がどのように今日の自然科学と手を携えて発展していかれるかについての豊かな、そして有力な着眼を提起しえた論文として、博士(文学)の学位に値すると判断する。